



Title	教育と進修に就いて
Author(s)	稲田, 穰
Citation	懐徳. 1926, 4, p. 2-3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88722
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

れを求め去られたが、光緒の中頃に當つて(千九百年—千九百一年)英國印度政府派遣する所のハンガリー人スマイン博士が古を我が和蘭に訪ふて、尼雅河の下流廢址に於て、魏晉間の人が書いた所の木簡數十枚を得た。嗣いで光緒の末年(千九百〇六年—千九百〇八年)前後して羅布淖爾の東北故城に於て、前後晉初の人が書いた木簡百餘枚を得た。(原物は均しく英國博物館の收藏に歸した)是は皆佛人チャバンス教授の考釋を経て、其の第一次得る所は、ス氏の和蘭故蹟中に印せられ、第二次得る所は別に專書となり、民國二年三年の間に出版された。此の項木簡中には古書(蒼頡篇急就篇等)曆日方背があるが、其の大半は皆屯戍簿録である。(また公文案卷信札等もある)史地二學に於て關係極めて大なるものである。民國二年の冬、チャバンス教授は、其の校訂未印成の本を羅叔言參事に寄せたので、羅氏は余と與に重ねて考訂を加へ、スマイン氏が和蘭に於て得た所のものとを併せ、景印して世に行ふた。所謂流沙瑣簡(民國三年四月出版、譯者云三冊)是れである。此の外露國人ヘドニーも亦得る所があり、また日本人大谷光瑞が得る所西域圖譜一書がある、併し其の中木簡はただ吐魯番の二三枚のみである。(未完)

始皇本紀を讀みて

阮儒史實の一説に及ぶ
今西 茂喜

司馬遷の秦及始皇本紀を叙するや、筆意高遠、行文明潔、殊に豪邁果敢の始皇の爲人を以てして、其潑瀾たる性情を發露するの文中、鬼氣ありて宛然眼中其人を見るの思あらしむ、現に帝の果斷の態を形すに、往々(怒)(大怒)の文字を冠して、以て四圍の史實を躍動せしむるの妙、不覺打案快を呼ばしむるものあり、素是れ先天的貴族の出として、遙蕩恣睢小節に拘拘たらず、遠大の希望を懷くの半面に、直情徑行後圖の慮少く、爲めに亭國の多難ならざりしは痛惜に堪へず、其偉勳中屈指すべき(一)僅々十三歳にして即位し、爾後十年にして六國を戡定し、(二)李斯、尉繚子等の俊才を任用し國政に與からしめ、周公の制せし諡號を廢して君臣父子の大義を絶對ならしめ、以て自から古を成し、文化革新に急なる、大篆に代ふるに小篆を以てし、更に程遷を獄中より起して隸書三千字を制せしめ、直に之を御史に擢用し、(三)嫪毐の亂に一朝の怒に乗じて太后を遷したるも、一布衣茅焦の諫を容れて大后を咸陽に遷し奉り、(四)居常敬神の念に篤く、雲夢に舜帝を望祀し、會稽に大禹を祭り、而して大禹の爲に苦しめられし湘君の祠は舜二妻を祀ると聞きて、直ちに全山を繕にしたると、神仙に憧憬の

餘、徐福をして齊の童男女二千人を齋戒沐浴せしめ、吾邦に渡航せし敬虔の態度と、(五)國論統一の必要上、博士官の外詩書百家の書を藏するを禁じたるも、盧生侯生等の始皇の旨に忤ふに及び、諸生等を案問するに(諸生傳相告引、乃自除者四百六十餘人)見て、彼等の腐腸敗肝を憤るの末、之を阮殺せり、余思ふに、始皇の爲政の上乗なるもの坑儒實に其一に居る而して坑殺方法に至つしは古來史傳無し、余頃日東坡詩注を讀み、一詩を得て之を知り、不覺掩卷痛快を叫ぶに至る、

飲酒臺 蘇東坡

博士雅好飲。空山與誰娛。莫向驪山去。君王不喜儒。

注史記所載坑儒、止曰坑之咸陽而歐陽率更難於瓜部中、載古文奇字云、始皇密令人種瓜驪山研谷中、瓜實成、令人上書曰、瓜冬有實、有詔下博士諸生、說之人人各異、則皆使往視之、而爲伏機、諸儒生皆至方相難不決、因發機從上皆壓殺。

秦皇山來超世的大偉人にして、當時の凡庸國民に君臨するには、餘りに賢明の天子たりし也、故に博士輩の喁々の聲に耳を假して國政を料理するは不可望の事に屬す、其土彼等の資性陋劣怯懦にして、不足侍事は疾に皇帝の看破する所にして、焚書坑儒固より必然の處置として當然謳歌すべし、後世儒者の下せし(暴秦)(虎狼秦)の評語は失當の極と謂ふべく、但、遷也時に此口吻無きにあらずるも、

是斷じて遷の本意にあらず、何とせば、遷也漢の深響たる始皇並項羽等を本紀に列し、高祖と同格の班に就かしめ遠く三王五帝の德に配せしめたるの眞意は、董狐以來の良史として、漢廷に對する諷刺を該ね、威武不可屈の志操の皓潔を表するものと解すべく、之比して、吾山陽外史の豐臣氏を傳するに、之を徳川氏前記に班したるの態度を見るに、正に霄壤の差あるを覺ゆ、

今古不世出の英主を傳するに、雄大豪俠の靈筆を以てす、宜矣其雄魂をして萬古灰ならす、筆端の呵詩亦能く英雄の心事を解するを見、卑見庶幾は誤なからん乎、謹で教を君子に請ふ、(第五十一議會閉會當日記)

教育と進修に就て

稲田 穰

頃日學年替りの場合、例の中等以上の諸學校に於て、選拔試験の混雜は相變らずの次第にて、言はば己れの學才杯には全く頓着せず、猫も杓子も、家庭の事情相許す限り、男女どなく、無暗と高級校の入学を志望するの有様にて、其學校卒業後の處世方針杯に到ては、本人は固より父兄に於ても、未だ全く決定し居らず、加之彼等中には、中學校教科の性質すら能くは辨知せず、兎に角中學史は卒業せねばならぬと爲し、甚しきは、高令なり、官公吏登庸上の手續、又は試験規則の不備不用意の結果に

其の二年丈にても、中學若は女學校へ入れたしと希望するものさへあり、誠に笑止の至なり、余曾て地方郡宰の職に在り、當時の事情今日に相及ばざる遙かなるものありしに不拘、余は切に此の無意義なる向上心の勃發を憂ひ、懇ろに中等實業教育の奨励に努め、就中高等教育を懇求するものと雖も、可成專門學校に向ふを期せしめたりしが、目今の情況は層一層益々其弊に堪へず、兎に角大學に入らずんばの意氣込愈々盛なるものありに至れり、

而して其大學や專門校の卒業者は如何にと見るに、近來の如くにては職業の選擇杯無論本意に任せず、辛くも何等かの職務に在り附くを以て満足せざるべからず、甚しきは實業側の如き、學歷の高き就職の難きを加ふるの有様にして、科學的智識を職務上に應用するが如きは、到底望むべきにあらず、要するに學歷は求職の場合、履歷書を飾るの一要素に過ぎずして、今は却て其高ければ高き就職難を加へて、全く自縛自縛の感なき能はず、殊に女子に在ては女學校は先づ可なりとするも、高等の教育を加ふるに隨ひ、反比例に、婦徳上如何敷行動相現はれ、遂に家庭にさへ容れられ難きものあるに至るは浩歎の外なしとす。

如斯は現行制度に於ける文官任用令なり、官公吏登庸上の手續、又は試験規則の不備不用意の結果に

も依るべけれども、要は積年馴致したる官督民卑の弊より来る一種反抗的向上心の致す處、誰彼となく、只だ「エラック」なるもの希望熾烈にして所謂「エライ」と云ふ所以のものの單に給料生活に限ると心得たるの結果にして、爲に家庭は老壯離散隔居し、地方は荒廢され只管都會集中の弊害を重ねる有様とはなれり、而して是等新進有爲の所謂學閥の新人が、平素の心掛なり自己又は其家眷の修養は如何にと見るに、遺憾ながら多く言ふに忍びざるが如きものなきに非らずして、而かも處世の傍ら、公職の餘暇、讀書趣味丈にても保有して切ては自らの進修に努めつゝあるものすら、實に絶無稀有の現況なるは心細き次第ならずや。

前述の如く余は主義として、自己の肩書を得んが爲、若くは就職上の方便上、徒らに高級校の入学を事とするの弊習を痛感する一人なるが、假りに數歩を譲り、是等一種の名譽慾は各自の自由意思に任せ、深くは追究せずとするも、是等有爲の青壯年、即ち新日本の將來を背負ふべき重責あるの新人諸子が、只何等かの職業に在り附くを以て足れりとし、自己若は家眷の爲に、進修的心掛をも打忘れ、古來堂々たる歴史ある、此懷德堂の如き好機關すら利用せざるに到りては實に其人の人格の爲に惜むべき而已ならず、各其母校に負ふ責任、延いては母校の存立上國家

に蒙る處の義務の爲に允すべからざるものとす、故に余は斯かる意味に於て、本堂が折角の諸設備に關して、市民の志望に應じ能はざるの盛況を觀るに至らざるの今日、一は未だ充分周知宣傳の足らざるにも職由すべしと雖も、斯道の上に浩歎に堪へざる而已ならず市民の體面、品位、智識程度等に於て、誠に恥づべきの至と言はざるべからず、人は終生學ぶべく、磨くべく、聴くべしにて、彼の六十年の學習杯言俗諺の如き、實に前世紀の戯語に過ぎず、朝に道を聴いて夕に死するの決心あるべきなり、我業既に成れりと思ふものゝ如きは、世潮に遅れ、社會に疎せらるる陋劣の甚しき志想とす、猛省せざる可らず。

所 感 阪田 廣吉

支那と云ふ國は實に困つた國である、治まつたかと思ふと、又動亂が起る、而して日本人の之れに對する考へも、亦始終動いて居るやうで、樂觀して見たり悲觀して見たりして居る。是は詰り支那の事情が分らない結果であるまいか。元來國事を論じ國勢を研究せんとせば、先づ其の國の歴史は勿論、其の國民性を解せなければならぬ。それに就いて私の想ひ起すことは嘗て市村博士が講演された時に、古書の中より面白い記事を見出したとて話された一節である。それは南宋の末の周密と云ふ學者が書

いた癸辛雜識と云ふ隨筆の中に在る事だが今の浙江杭州に咸慈庵と云ふ寺がある。其の住職は德明と云つて、相當學問もあつた所から大分門下の者もあつた。其の時に日本の僧定心といふのが此の寺に留學して居たが、或る日住職等と一緒に菌を取りに往つた。而して種々の菌を取つて歸り、これを煮て食べた所が忽ち皆が中毒を起した。中には死した者もあつたが、其の際に或る人が來て、菌の中毒は人糞を食へば毒消になると告げた。そこで德明和尚は直に人糞を食つて爲に命を助かつた、然るに定心は、拙者は死んでも人糞など食はぬと力んで、終に五體滅裂して死んで了つたと云ふ話なんである、其面白く話でないか。此の定心と云ふ僧は、相摸國の人だといふことで、眞否は分らぬが、其の所持の度牒の中に、久安（鳥羽天皇の時の年號）保安（近衛天皇の時の年號）など云ふ年號が書いてあつたさうであるから、確かに日本人に相違ない、而して其の事を當時の學者が隨筆の中に書留めた所を見ると、日本人と云ふものは如何にも不思議な國民である。と云ふ感想で書いたものらしい。さて日本人と支那人とが此の中毒の際に當つて何故斯様に態度が違つたか、これが日本人と支那人との國民性の違ふ點である、全体人は生命が一番尊いと云ふことにな

が、生命より他に尊いものがある。と云ふことになつて、そこに始めて人間らしい行動が出来るのである。所が支那人の總ての行動を見ると、大抵利害觀念に支配されないのである、其の利害觀念の生中では最も痛切に感ずるものは、生命財産である。故に此の問題になると支那人の本性が忽ち現はれて來る、即ち支那人の慘忍性を帯びて居ること、利己主義なること、及び附和雷同することなど、總て其の方面から出ないことはない。故に支那の國民性を解釋するには此の利害觀念と云ふ點を捉へないと眞に其の國民性を窺ふことが出来ない。尤も利害の觀念は誰にもない譯ではないが特に支那人に於て痛切に感ぜられる。此の毒菌を食つた場合に、生命は大切であるから、人糞を食つても助からうと云ふのは、生命を非常に重きに置いたものである。然るに人間としては人糞など食ふべきでない、それは豚や犬かである、死んでも犬や豚の行動をすることは出来ない。と云ふのが、即ち日本人の特色であつたやうに思はれる、所が此の精神を今日でも尙ほ日本の國民が有つて居るかどうか、私が今日此の事を記した所以は、此の菌問題に就て、支那人の態度が是か、日本人の態度が好いか、若し此の時

たものと思ふ。若し然らずして日本人の態度好いと感ぜられるならば、まだ日本の國民性が存在して居る譯で、頼もしいことである。西隣の支那とは唇齒輔車の國柄であるから、何處までも親善を謀らねばならぬことは申すまでもないが、國民性を變じてまでもと云ふ譯にはいかぬ。徹頭徹尾定心の意氣があつて欲しいと私は思ふのである。

我 郷

林田 炭翁

可採紅薇可濯纓。望山鬱鬱水清清。文賢輩出今猶昔。最顯香山學士名。
懷壯丹花更
牛背遺歌世久傳。人稱地上一神仙。牡丹更似漆園叟。蝶夢春風四百年。
讀牡丹花隱君遺愛碑
來讀牡丹花更碑。夏初新綠杜鵑啼。一聲啼過千林靜。今日風流續者誰。
初春欲散步畏寒而歸 內村無忌
探梅問柳事何堪。二月天寒春未濃。爐畔連旬空擁被。門前今日始携筇。晴煙淡淡籠平野。殘雪斑斑橫四峯。迴逕長堤行不得。勁風猶刺舊衣重。
春曉對雪
東風何料峭。清曉雪花稠。凜凜徹吟骨。皚皚映睡眸。殘梅猶寄傲。嫩柳轉含愁。起坐依欄處。呼童取嫩裘。
春日訪友人村莊
踏春來訪故人家。野鳥盡頭幽徑斜。門外先看詩趣足。綠楊枝雜白桃花。日暖風恬春滿。然桃花妍笑柳枝眠。一筇來訪林泉友。家在鶯歌燕舞邊。